

大乗止の

上

西村寿行

學
麻
書

江苏工业学院图书馆
藏 书 章

天

上

寿行

角川書店

学歴のない犬上

平成元年八月三十日初版発行

著 者 西村寿行

発行者 角川春樹

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店



東京都千代田区富士見二一三—三

電話 営業〇三—八一七—八五二—

編集〇三—八一七—八四五—

振替東京三一—九五二〇八 千一〇二—

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-872528-9 C0093

目次☆学歴のない犬上

第一章 千二百時間 5

第二章 無明界むみょうかいへの旅立ち 25

第三章 マン・イーター
人喰い 63

第四章 屍しかばねの山岳 100

第五章 狂った夏 151

第六章 未来への扉 196

題字／金田石城
装丁／須藤隆夫
写真／世界文化フォト

学歴のない犬上

【第一章】 千二百時間

—

真夏の陽の光りが天井のガラスから落ちていた。

人気がないはずの洗濯場にかすかな人声がきこえた。

伊神一武は乾してある洗濯物を分けた。

声の主はすぐにみつかった。毛利和義と中井浩二であつた。中井が柱につかまって尻を差し出してゐた。裸だ。その尻を毛利が舐めていた。中井はたち代の後半で毛利は三十なかば。若い中井の尻は陽射しに白く光っていた。

「早くして、時間がないよ」

中井は焦っていた。

そのとおりだ。刑務所の休憩時間は正味が十分ほどしかない。あとわずかだ。洗濯場での性交では男根を舐め合う暇はない。毛利がおのれの男根に医務室からくすねて来たらしいワセリンを塗った。中井の肛門にも塗った。両手で尻を拡げながら毛利が男根を肛門に当てがった。中井が

小さな声をだした。

一気に挿入した。挿入して毛利は右手を前に回して中井の男根を擦りはじめた。中井は小刻みに尻を動かしている。毛利が擦る中井の男根は毛利のよりはるかに大きい。逆のようだが男役と女役は決まっている。

伊神は黙ってみていた。

男役は女役にタバコをやったり食事を分けてやったりしてなにかと庇う。女役は男役の下着を洗ったりして仕える。ふつうの男女関係とかわらない。

毛利は伊神の雑居房の牢主だ。牢主というのは制度上はないが現実にはある。便器からもっとも離れたところに布団を敷くのが牢主。ふつうは布団の始末を牢主はしない。配下にやらせる。うまいものを独り占めする。だが、伊神の雑居房では毛利はその権利を放棄していた。房には六人いる。毛利は伊神たちをおそれていた。脅したわけではないが毛利は気色悪がっていた。異端者じみた眸でみる。

毛利も中井も殺人罪。

中井が入って来たのは一カ月ほど前。色白の若者だった。入って来た中井をみて毛利の濁った眸に生色が戻った。つきまとして毛利は中井の世話をやいた。その世話を中井は平気で受けた。入房して五日目に毛利は中井の布団に移った。中井は応じなかった。毛利は諦めない。つぎの日の晩に戦法を変えた。そつと中井の男根に触った。世話になっているからそのていどなら中井はじっとしていた。毛利は中井を怒らせないように気を配って手淫に持ち込んだ。射精して、中井はおとなしくなった。

二、三日後のことであつた。夜半に毛利が正常位で中井を押え込んだ。中井の尻の下には枕を

当てがってあつた。その恰好で肛門に挿入できたのだから同房者は呆れた。

房内では遠慮しろと、伊神が二人に釘を差した。

見回りが厳しいからそのうちにならず現場を押えられる。押えられたら毛利か中井のどちらかが独居房に移される。それはどうでもよいが二階一房への看守の風当たりがさらに強くなる。伊神たちは看守にも嫌われていたからだ。

毛利と中井は洗濯場に褥を移したようだ。

房を除けば洗濯場以外に刑務所では番う場所がない。

いくいく——中井があえいだ。待て、まだだ——毛利が遮った。しかし、中井はうめいて射精してしまった。毛利は尻を抱えて懸命に責めつづけた。

まだなの、早くしてよ——中井がしらけたものいいをした。

「うるさい！」

焦った毛利が背中を平手で叩いた。

「ふざけるんじゃないぜ！」

中井が突っ立った。

「おまえはアンコだ。黙って掘らせてりゃいいんだ！」

「いけもしないくせに、断わる！」

「やろうっていうのか！」

殺人者同士が睨み合った。

「よさんか」

伊神が声をかけた。

人間の屑くずだが同房者だから捨てておくわけにはいかなかった。

「遅かったな」

「ああ」

うなずいて伊神は一色真文と拝郷長行の傍に腰を下ろした。

二人とも同房者であった。もう一人の同房者、九能五郎はキャッチボールに興じている。

「あいつをしろ。目つきがおかしいぜ」

一色が隣房の長田おさだを目で指した。

長田はぼんやりとただ立っていた。意識がないのに立っているといった感じだった。

「拘禁症か」

伊神。

「ろくなことにはならないぜ、あの様子は」

さっきから一色は長田をみていた。

「やつは、翼を欲しがっている」

拝郷も長田をみていた。

「人間に翼があれば、地球はこうはひどくはならなかった……」

伊神はつぶやいた。

人間は増えずで屑くずになっていた。拘禁症は長田ばかりではない。すべての人間が自由を失って拘禁症にかかっていた。鼠ねずみは増えずで空間スペースがなくなるとホルモンのバランスが崩れて雄同士、雌同士の性交をはじめ。崩壊はそこからはじまる。内部崩壊クラッシュが高まって死への大行進をはじめ

る。一種の拘禁症といえなくもない。

中井と毛利も拘禁症に罹^{かか}っていた。人間の屑を掃き集めた刑務所では看守も含めてすべてが拘禁症にかかっていた。男根の飾りに異様な執心を燃やす。先端の皮膚を切つてその中に玉を入れる。玉は歯ブラシの柄。小さく切つてコンクリートやガラスで磨いて玉にする。そいつを入れる。血まみれになるがくじけたりはしない。四個から五個も入れている剛の者もある。玉を入れた男根に女は抵抗できない。何倍もの快感に襲われて失神すると伝えられている。歯ブラシの柄には色があるから赤や白や黄の玉が男根を飾ることになる。

看守は看守で男根調べに熱中する。玉を検査する。玉検だ。そのたびに全囚人が看守の前に男根を差し出す。軍手でひねくり回して調べる。入所時にあつた玉は記録されているからそれ以上あれば規則違反となる。入れるほうもそうだが調べるほうもどうかしている。そんなものは捨てておけばよいのだ。犬が自分のシッポを追うのに似てどちらも病気に罹りそれを深めていた。

刑務所は異常に裸が好きだ。

囚人は工場で働く。居住房から工場に行く往きと復^{かえ}りの二回、かならず全裸にされる。両手をひらひらさせて踊らされる。カンカン踊りだ。看守はそうすることで囚人の人権を踏みにじる。囚人に人権があつてはならないのだ。

看守は自分のことを「先生」と呼ばせる。仲間同士でも先生と呼び合う。看守長になると「官」になる。「官は」と自分のことをいう。正式の名称は法務省刑務官看守。なのに刑務官も看守も嫌う。ひどく嫌がる。看守と囚人は同類と承知しているからそこから離れたがる。先生と官に逃避する。そこから囚人の裸責めが出る。逃避が病^{ぐまい}でおのれが病んでいることを看守は悟らな

刑務所そのものが拘禁症に冒^{おか}されている。

拘禁症は精神病の一つ。

刑務所はすべての自由を剝奪^{はくたつ}する。便器も房の中。人間にとって最大の屈辱は人前での用便である。そのつぎが男根検査。見回りは十五分おき。房内では妄^まりに動いてはならない。正坐か安坐だ。同房者同士の会話の内容も規制される。他房の囚人と話をしてはならない。大きな声を出してもいけない。騒いだら保安房に入れられる。

保安房では皮製の手錠をかけられる。片手は前、片手はうしろに回してベルトに固定される。それでもまだ騒いだら防声具を被^{かぶ}せられる。咬^かみ癖のある犬の口に被せる防咬具^{ぼうこうぐ}に似ている。身動きがかなわなくなる。

保安房には窓はない。あるのはテレビカメラだけ。飯は床に置かれる。身動きができないから腹這^{はらば}って喰^くう。犬喰いという。大小便はたれ流し。出房したあとでホースで水を流す。そのために床も壁もリノリウムでできている。

拘禁症にかかるのは拘置所の未決囚人に多い。刑が定まらないから動揺がはげしい。外界のことを思う。家族のことを思う。思い詰める。拘禁症はそこから出て来る。身心症だからどこに出るかわからない。ありとあらゆるところに異変は芽を出す。往々にして独り言からはじまる。腹痛、頭痛などに移行する。やがて、痙攣^{けいれん}、幻臭、幻覚が出てくる。

刑務所の囚人には拘禁症は比較的すくない。刑期が決まっているからだ。それでも患者は出る。独居房囚人に多い。外界のことしか思わなくなる。思いつめていると独り言が出る。本人は独り言に気づかない。精神の暗部が喋^{しゃべ}っているからだ。そのうちに狂暴になる。思いつめた果ては破壊しかないからだ。窓ガラスを叩き割り、机、洗面器具、私物——ありとあらゆる物を叩きつけ

て壊す。荒れ狂う。危険だから看守は壊し終わるまで房内に入らない。囚人は自殺房に送られることになる。自殺防止房だ。破壊はやがて内部に向かい自己破壊へと進む。

いっさいの自由を剝奪すると人間は自分を殺すしかになる。

「おい！」

一色の声で、伊神は長田をみた。

長田は金網に向かって小走りに走っていた。家に帰ると、うしろ姿がいつていた。家に帰るとしか長田は考えていない。長田は金網をよじ登った。看守がうろたえて追った。長田は金網を越えた。看守がつづいた。なおも長田は走った。外界との境に高い塀がある。その塀の前で長田は足を停めた。どうしてこんなものがあるのかというふうに長田は塀を見上げた。

「やつは、無実かもしれない」

看守たちに引きずり倒された長田をみて、拝郷がつぶやいた。

「無実か……」

伊神は低い声を落とした。

伊神は無実だった。

逮捕されたときには伊神は警察庁警視だった。国家公務員上級試験をパスして警察庁に入った。国際刑事事課に五年間いたのちにボストン市警察に公費留学を命じられた。帰国して外事警察に配属された。キャリア組の順調なスタートだった。

ある日、アメリカから、ロイ・スタンが訪ねて来た。

留学時代につき合っていた友人の一人だった。伊神はスタンを新宿に案内して飲んだ。スタン

は一週間ほど日本に滞在するという。二、三日中にもういちど飲むことにして伊神はスタンと別れた。

それから五日間が過ぎた。スタンはなんの連絡もして来なかった。妙だとは思ったがさほど気にしたわけではなかった。

スタンと別れてから一週間目の深夜だった。

渋谷区にある伊神のマンションに数人の男が踏み込んで来た。麻薬取締官であった。うむをいわせぬ家宅捜索がはじまった。伊神はあつけにとられてみていた。そのうちに伊神の貌が凍った。冷蔵庫の隅から約三百グラムのコカインが取り出された。

伊神はその場で逮捕された。

何者かが設けた陥穽だと伊神は悟った。麻薬などに手を出したことはなかったからだ。

伊神は起訴された。警察庁長官は特別声明を出して例のない不祥事を国民に深く詫びた。警察庁警視が麻薬で起訴されたのだからだごとではなかった。マスコミは警察不信を書き立てた。世論は怒り一色となった。警察庁も怒りを露にした。

裁判で伊神は敗れた。弁護士は善戦したが裁判官も国民とともに怒っていたからどうにもならなかった。一罰百戒となった。弁護士は不当判決だといきまいた。

スタンは伊神と会った夜に、関東信越麻薬取締官事務所に逮捕されていた。スタンは伊神に代金後送でコカインを渡したことを自供した。スタンはアメリカで麻薬ディーラーに関係していた。麻薬取締官事務所は情報を得て来日したスタンを監視していたのだった。スタンと取引した相手は警察庁警視。麻薬取締官事務所は緊張した。様子をみることにした。伊神がコカインを当局に届け出る可能性があったからだ。一週間、待ったのはそのためだった。

スタンは退去強制させられた。いわゆる強制送還だ。Gメンはスタンと伊神のコカインの受け渡し現場を攔^{とら}んではない。会った相手が警察庁警視だからだ。まさかとなったのだった。スタンは自供したが自供だけでは裁判には勝てない。弁護士がつけばスタンは自供を撤回する。弁護士は証拠を要求する。勝てないとわかっていて起訴はできないから警察庁はスタンを目外へ退去させた。

伊神の弁護士はそこを衝いた。

スタンを召喚するか新たに供述書を提出させるべきだと喰い下がった。本件は何者が企^{たくら}んだデッチ上げだと、迫った。しかし、通じなかった。弁護士はたちどころに控訴した。だが、その控訴は棄却された。

伊神は上告を棄てた。勝てる要素がなかったからだ。陥穽は単純だけに崩しようがなかった。唯一の希^{ぞろ}みはアメリカに強制送還されたスタンの供述だがスタンの居場所は弁護士には掴めなかった。スタンは雲隠れしていて、手を尽くしたが無駄だった。

伊神は刑に服した。警察庁は懲戒免職。麻薬取締官事務所に逮捕された時点で人生は終わったのだった。

——何者が嵌^はめたのか。

伊神は考え抜いた。

スタンはカネで雇われたのだ。問題はだれがなんのために雇ったのかだ。見当がつかなかった。不可解だった。常識的には伊神を陥れて得をする人物がいなければならない。その人物がいらない。財産はない。マンションの一室だけだ。遺産もどこからも入る立場にはない。恨みは買われてはいない。国際刑事課や外事課は個人に恨みを買われるセクションではない。都道府県警を監督す

る警察庁そのものがそうだ。残るのは地位。伊神が消えて得をする人物がいるかとなると、皆無。だれかが電話帳を繰った。そこに伊神が載っていてそのだれかの目についた。だから伊神はおとし陥れられた。そのだれかはそれが趣味だった——考え抜いて、理解はそこにおちついた。

——脱獄。

伊神の思いはそこに絞られていた。

何者の設けた陥穽かはもう考えない。趣味人がやったのだ。その趣味人がわかったところで人生のやりなおしはきかない。また、わかりもしない。人生は逮捕された時点で終わったのだ。いまの伊神に必要なのは自由だった。

機会を待つて脱獄する。脱獄して社会に牙を剥く。追って来る者は殺す。手段は選ばない。いつかは殺される。それを覚悟の上の殺し合いだ。殺されるにしてもそれまでは自由がある。山野に寝ることができる。鳶や鴉をみることができる。草木にも触れられる。人生を失った者でも自然は迎え入れる。龐大な量の自然が待つていた。

工場への行き帰りのたびに全裸にしてカンカン踊りをやらせる拘禁症にかかった刑務所にいのちを托すわけにはいかない。

「官が来たぜ」

一色が嗤った。

長田の脱走騒ぎで看守長が駆けつけていた。一色たちは先生とも官とも呼ばない。看守と呼ぶ。それで陰惨な仕返しを受けていた。刑務所では看守は絶対権限をもつ。風呂の禁止、運動の禁止、読書禁止、作業禁止、懲罰房送り、保安房送りは看守の権限だ。これまでにさんざんやられたが一色は折れない。伊神も拝郷も折れない。折れないと看守はますます拘禁症を深める。おのれが